

日本財団補助金による

1999 年度日中医学協力事業報告書

- 学会開催に対する助成 -

2000 年 / 月 28 日

財団法人 日中医学協会
理事長 中島章 殿

報告者氏名 森本武彦 
所属・役職 愛媛大学医学部小児科・助教授
所在地 〒791-0295 愛媛県温泉郡志津川
電話 089-960-5320 内線 _____

講演集・シンポジウム写真等学会に関する資料を添付

学会・学術交流の名称 第6回日中友好糖尿病シンポジウム
テ マ 日中両国の糖尿病学・糖尿病医療の進歩をめざして
主催団体 第6回日中友好糖尿病シンポジウム組織委員会
代表者 貴田嘉一
期間・開催地 平成11年11月18～21日・松山市
参加者数 日本側 100 名 中国側 67 名
招へい・派遣目的 日中両国の糖尿病学の専門家が集い意見を交換することによって
両国の糖尿病学、糖尿病臨床を発展させること

1. 招へい・派遣研究者 人数 67 人 記入欄不足の場合は別紙を添付。

氏名	所属・役職	研究分野
別紙	別紙	別紙

滞在期間 自 1999 年 11 月 17 日 至 1999 年 11 月 23 日

氏名	所属・役職	研究分野
錢榮立	北京医科大学第一医院 教授 中華医学会糖尿病分会 会長	糖尿病学
趙書貴	中華医学会 副秘書長	
項坤三	上海市第六人民医院 教授 中華医学会糖尿病分会 副会長	〃
陳家偉	南京医科大学第一附属医院 教授 中華医学会糖尿病分会 副会長	〃
向紅丁	北京協和医院 教授 中華医学会糖尿病分会 常務理事	〃
楊文英	北京中日友好医院 教授 中華医学会糖尿病分会 常務理事	〃
王家馳	天津医科大学代謝病医院 教授 中華医学会糖尿病分会 常務理事	〃
劉国良	中国医科大学第一臨床学院 教授 中華医学会糖尿病分会 常務理事	〃
李秀鈞	成都華西医科大学附属第一医院 教授 中華医学会糖尿病分会 常務理事	〃
顏純	首都医科大学附属北京兒童医院 教授	〃
包仕堯	蘇州医学院附属第二医院 教授	〃
柴偉棟	南京医科大学第一附属医院 主治醫師	〃
昌玉蘭	江西医学院第一附属医院 教授	〃
陳偉	北京協和医院 住院醫師	〃
陳莉明	天津医科大学代謝病医院 主治醫師	〃
程樺	廣州中山医科大学孫逸仙紀念医院 教授	〃

氏名	所属・役職	研究分野
遲家敏	北京医院 教授	糖尿病学
東野光	山東省泰山医学院附属医院 教授	〃
薰鳳芹	浙江医科大学付属第一医院 住院醫師	〃
薰偃琴	中華医学会學術会務部 副主任	〃
薰硯虎	潍坊医学院附屬市人民医院 教授	〃
竇京涛	北京301医院 主治醫師	〃
範麗鳳	北京301医院 副主任護師	〃
傅静奕	成都華西医科大学付属第一医院 住院醫師	〃
高妍	北京医科大学附屬第一医院 教授	〃
高紅軍	中華医学会北京分会學術会務部 主治醫師	〃
谷衛	浙江医科大学付属第二医院 副教授	〃
郭曉惠	北京医科大学第一医院 副教授	〃
紀立農	北京医科大学人民医院 副教授	〃
賈偉平	上海市第六人民医院 副教授	〃
金之欣	同濟医科大学付属同濟医院 教授	〃
李剛	中華医学会事務局 主任	〃
李焱	廣州中山医科大学孫逸仙紀念医院 主治醫師	〃
李王京芳	北京医科大学第三医院 教授	〃
李新華	中国預防医学科学院 副研究員	〃
李玉秀	北京協和医院 主治醫師	〃
廖二元	湖南医科大学第二付属医院 教授	〃
林麗香	副建省立医院 教授	〃
劉彦君	北京306医院 副教授	〃
劉彦群	徐州医学院附屬医院 教授	〃
劉尊永	中国預防医学科学院勞働衛生研究所 副研究員	〃
盧紋凱	北京医科大学人民医院 教授	〃

氏名	所属・役職	研究分野
陸俊茜	上海市第六人民医院 技師	糖尿病学
羅邦堯	上海第二医科大学附属瑞金医院 教授	〃
馬素雲	中華医学会对外連絡部 主任	〃
倪桂臣	首都医科大学附属北京兒童医院 教授	〃
錢海鑫	蘇州医学院附属第一医院 教授	〃
荣蓉	上海第二医科大学附属瑞金医院 住院医師	〃
桑艷梅	首都医科大学附属北京兒童医院 主治医師	〃
沈稚舟	上海医科大学華山医院 教授	〃
孫王奇	北京協和医院 副教授	〃
童光煥	西安第四軍医大学附属唐都医院 教授	〃
童鐘杭	浙江医科大学附属第一医院 教授	〃
王德全	山東医科大学附属医院 教授	〃
吳海玉	湖南医科大学第二附属医院 技師	〃
伍漢文	湖南医科大学第二附属医院 教授	〃
邢小燕	北京中日友好医院 副教授	〃
楊剛毅	重慶医科大学附属第一医院 主治医師	〃
楊華章	廣東省人民医院 教授	〃
伊致文	昆明市第一人民医院 教授	〃
宇德民	天津医科大学代謝病医院 教授	〃
張國珍	福建医科大学附属協和医院 教授	〃
張立華	中華医学会对外連絡部 通訊	〃
張士明	天津医科大学第二医院 教授	〃
朱良湘	北京同仁医院 教授	〃
鄒敏漫	北京301医院 主治医師	〃
左靜南	上海第二医科大学新華医院 教授	〃

第6回日中友好糖尿病シンポジウム

日中両国の糖尿病学・糖尿病医療の進歩をめざして

日本側主催代表者

貴田嘉一（愛媛大学医学部小児科 教授）

中国側代表者

銭榮立（北京医科大学第一医院 教授）

学会報告

森本武彦（愛媛大学医学部小児科 助教授）

本学会に、中国側からは中華医学会糖尿病分会会長、中華医学会副秘書長をはじめ中国各地域の大学、病院から論文審査で選出された糖尿病専門家が約70名、日本側から約100名の糖尿病専門家が参加した。

学会では、最初にKaichi Kidaによる会頭講演で『小児期の2型糖尿病』と題し初めに、日本人においては小児思春期の2型糖尿病の発症頻度が民族的に高いことを報告しこれが、日本人小児をとりまく環境の変化と日本人が有する遺伝的特徴の両者に起因するものであることを述べた。そして、小児期における2型糖尿病が先進国で増加していること、またそのスクリーニングシステムの確立と予防プログラム開発が重要であることが述べられた。特別講演として4つの講演がなされ、中国側からはHan-Wen Wu教授により『中国におけるLADA (Latent Autoimmune Diabetes in Adults)に関する研究状況』という題で、LADAモデルマウスを使った免疫療法に関する研究また人での免疫抑制剤の治療効果についてその知見が紹介された。またRong-Li Qian教授によって『中国における2型糖尿病』という題で中国における2型糖尿病の疫学的研究、合併症、分子遺伝学的研究について報告がなされた。日本側からはTakashi Shimazu教授によって『レプチンとグルコースホメオスターシスの中枢制御との関係』について講義がなされ、レプチンが視床下部に作用しVMH-sympathetic nervous systemを介して褐色細胞、筋などの末梢におけるグルコースの取り込みを促進していることが示された。Kazuya Yamagata先生から『MODY(maturity-onset diabetes of the young)に関する最新の知見』という題で、MODYに関する最新の知見が紹介された。またTopic lectureとしてKyohei Nonaka教授により『Soft Drink Ketosis』についてその臨床像について講演がなされた。Plenary lectureでは『WHOによる糖尿病の新しい分類』についてMaximilian De Courten教授によって講演がなされた。Business Lectureでは、最近発表されたADA（米国糖尿病学会）、WHO、日本糖尿病学会による新しい糖尿病分類と診断基準について意見交換、討議がなされた。今回の学会では『小児の糖尿病』をテーマの1つとして特に取り上げた。『小児の糖尿病』についてシンポジウムでは5人の演者によって発表がなされた。シンポジウ

ムの中で中国における1型糖尿病の疫学的研究が報告され民族間で発症率に有意差の認められること、高緯度ほど発症立が高いことが報告された。また中国の小児IDDMの患児の抗GAD抗体についての報告がなされ中国での抗GAD抗体陽性率は他のアジア地域と同程度でヨーロッパアメリカより低いことがしめされた。日本からはHLA genotypeと1型糖尿病の関係についても報告され、糖尿病発症の民族的差異を説明するものとしてその知見が提示された。

また中国側から 発症早期の1型糖尿病に対するNicotinamideの治療効果が発表され発症1年以内のIDDMの糖代謝改善に有効との結果が示された。日本での小児IDDMの生命予後に関しては1975以後著しく改善しており腎透析を含めた医療の進歩と糖尿病のコントロールそのものの進歩が生命予後改善の要因であることが示された。一般演題では、中国側から23題、日本側から34題の発表がなされた。セッション1では糖尿病の病態について研究が発表され討議された。セッション2では日中両国における糖尿病の疫学的研究が中心に討議された。セッション3では糖代謝についての発表がなされた。セッション4ではインスリン抵抗性について討議された。セッション5では動物モデルについての発表がなされ、セッション6では治療について討議がなされた。セッション7と8では糖尿病合併症に関する研究が報告された。基礎的研究から臨床的研究にいたる幅広い領域の研究が発表され各セッションで活発な討議がなされた。

今回の学会では著名な臨床家や研究者の講演を企画したほか、若手研究者の参加を予め中国側に依頼したため将来性の期待される研究者が多く参加でき、参加者の間で活発な討論が展開されたことは両国の糖尿病研究の将来にとって有益であったと考えられる。懇親会などの集まりでも、親しい交流が出来、学術面だけでなく社会文化面での相互理解が深まったことは、今後の日中友好のためにも大きく寄与出来たものと考えられる。

現在中国の経済状況は急速に変化してきており、それによりライフスタイルも変化し2型糖尿病も増加している。これらの問題はすでに日本も経験したことであり、相互の情報を交換しさらに共同研究を推進し糖尿病の病態の研究、治療の開発さらには糖尿病予防をめざすことが必要である。今後日中糖尿病シンポジウムがこのような共同研究を推進するために貢献できることを期待したい。